

に100種前後のキノコと出会うことができました。不明種が非常に多く、調査は難航しております。

ゆいいつ鳥との関係がわかっているのがキツネノワンです。鳥が持ち込んだタネからヤマグワの木が育ち、そこにキツネノワンが発生しています。鳥獣保護区という場所ですので、他の生き物とキノコのかかわりが分かると面白いなと思っています。



キツネノワン 行徳鳥獣保護区のヤマグワの下にて
(2017年4月13日)

多くは珍しいキノコではありませんが、糟谷先生が保護区内で日本新産種のヒメシロフクロタケ *Volvopluteus earlei*※を発見(以下参照)。また、2018年9月の観察会では、カヤバノクヌギタケ(池田仮称) *Mycena* sp. を発見していただきました。今後の研究の進展が待たれます。

※ 糟谷大河・丸山隆史・池田裕・布施公幹・保坂健太郎, 2018, 日本新産種 *Volvopluteus earlei* (ハラタケ目, ウラベニガサ科), 日本菌学会会報 59: 47-52.

私たち行徳キノコ班は、キノコ探しを楽しみ、調べることを楽しみ、「発見し、知ること」の楽しみを地元の子どもたちに伝えることを楽しんでいます。定例調査や観察会のあとは、行徳近辺の飲み屋さんで生き物談義に花を咲かせています。随時、調査員募集中です。現在月2回(毎月第1土曜日と第3木曜日)定例調査を行なっています。ご興味のある方のご参加を心よりお待ちしております。

<連絡先> kvgwannyan@ybb.ne.jp (中村)

□

--*-*-*-*-*-*-*-*-*-*

【解説】●日本新産種 ヒメシロフクロタケ *Volvopluteus earlei*

ヒメシロフクロタケの和名は、子実体が小型で白色を帯び、柄の基部に袋状のつぼを持つことに由来する。本種の子実体は全体的に白色を帯び、かさが直径50mm以下と小型である点、担子胞子の長径の平均値が12μm以上である点、側シスチジアを欠く点、そして縁シスチジアにしばしば嘴状突起を持つ点により特徴づけられる。シロフクロタケは本種と類似するが、子実体がより大型であり、担子胞子がより大型で細長いこと、側シスチジアを豊富に有すること、縁シスチジアは通常、頂部の嘴状突起を欠くことで区別できる。

ヒメシロフクロタケは赤道付近の熱帯から北半球の温帯にかけて広く分布する。日本では、行徳鳥獣保護区のほか、新潟県柏崎市の海浜でも採集されている。ヨーロッ



ヒメシロフクロタケ

本種は新潟と千葉で採集された標本に基づき2018年に日本新産種として報告された。(新潟県柏崎市, 2017年8月20日)

パでは、本種は都市周辺の人工造成地に発生する傾向があるため、熱帯からの移入種ではないかと推測されている。日本でも、もしかしたら海外から侵入したきのこのかもしれない。(文・写真：糟谷大河/慶応義塾大学)

行徳鳥獣保護区に発生した
ヒメシロフクロタケの標本
(右2枚)とその担子孢子
の顕微鏡写真(左)
(2017年9月10日)



●カヤバノクヌギタケ (仮) *Mycena* sp.

カヤバノクヌギタケは、「北陸のきのこ図鑑」シリーズの著者である池田良幸氏により与えられた仮称である。石川県金沢市のススキ群落内で、ススキを刈り取った後に残った株の地際で発見されたことから、その名は茅場に生えるクヌギタケ、に由来する。このきのこは形態的特徴の観察や分子系統解析の結果、クヌギタケ属の未記載種であることが明らかとなっており(糟谷ら、未発表)、今後の分類学的な研究が必要である。カヤバノクヌギタケの子実体は全体的に淡い紅色で、かさの頂部は濃色となる点、かさやひだの縁部に濃い紅色の縁取りを持つ点、また両端が細長く伸長した紡錘形で、褐色の色素塊を含む側シスチジアを持つ点で特徴づけられる。

カヤバノクヌギタケは、石川県のほか神奈川県、富山県、大阪府、兵庫県、高知県など日本各地で発見されているが、千葉県ではこれまで見つかっていなかった。また、筆者(糟谷)はこのきのこがススキの地際や根茎上のほか、モウソウチクの根株上に発生した例も観察していたが、行徳鳥獣保護区ではヨシの根茎から発生する様子を初めて観察することができた。カヤバノクヌギタケは、これらイネ科植物に対する選好性があるようである。また、モウソウチク林内では、菌従属栄養植物であるアキザキヤツシロランと菌根を形成し、この植物の栄養供給に利用されていることも明らかとなっている(Ogura-Tsujita et al., 2009. Proc. Roy. Soc. B 276: 761-767)。

(文・写真：糟谷大河/慶応義塾大学)



カヤバノクヌギタケ

(行徳鳥獣保護区、2018年9月27日)